# 東洋史談話會大會講演概要

## 五代沙陀舊俗考

岡崎精郎

五代諸國に於いて、沙陀出身の人々が屢々支配階級の地位を獲得したのは著名な事實であるが、今回は、之等の人々に於いてその舊き習俗が如何に維持せられてゐたかといふことの瞥見を試みた。特に、代北沙陀三部落の出身たる後唐の明宗を採り上げ、天成二年六月、明宗が白司馬陂に幸して突厥神を祀つたこと（舊五代史卷三十八明宗紀・五代史記卷六唐本紀）が、たゞに明宗個人の武運長久の爲の祈願たりしのみでなく、よつて以て配下のトルコ出身の諸將に政治的に働きかけんとしたものではないか、部族意識の强化・團結力促進の意圖を藏するものではなかつたか、との推測を下した。次に、五代史記卷四十六霍彥威傳に「彥威徙鎮平盧。朱守殷反。伏誅。彥威遣使者。馳騎。獻兩箭爲賀。明宗賜兩箭。以報之。夷狄之法。起兵。令衆以傳箭爲號令。然非下得施於上也。明宗本出夷狄。而彥威武人。君臣皆不知禮。動多此類。」と見える記事を採り上げ、明宗と霍彥威との間の箭の贈答が果して如何なる意味のものかを攷へ、此事は、歐氏の考へた如き傳箭の風習に出づるものではなく、箭のもつ神聖性乃至呪術的力に負ふものではないか、といふ試案を提出した。五代時代に於いても華化は又もや繰返されねばならなかつたが、併しトルコ出身の武將の間には、先の明宗以外にも猶舊俗の維持せらるゝものゝあつたことは見逃すべきではない。舊俗が武人の生活に於いて見られることは、ひいては生活環境の問題に及ぶのである。

## 北宋朝に於ける僧官の性格

泉康順

北宋の施政方針は、前代以來の武斷政治を排し、文人を基礎とした强固なる中央集權の實を擧ぐると云ふにあつた事は縷説するまでもないが、斯る政策はまた

同じく、その對僧官政策の上にも明瞭に反映して居る。例へばその編制の上から眺めてみると、中央僧官としては、僧錄制に依る僧官を各々東西二京に配し、地方には原則として、在來見受けられた地方系僧官は設けられず、これに代つて名實共に南方系僧官の內容を有する僧正（江浙地方の僧判、僧監、僧錄も含む）へと整理統一されて來たやうである。（但し四川のみは僧統の遺制あり）而してこれら僧官は、中央のそれは開封府（功德使、鴻臚寺）、地方は祠部に各々隷屬せしめられ、その任命方法も前代屢々見受けられたところの獨立的勢力に依る事を排し、前者は科擧制、後者はその長官に依る推擧制（時には試驗制もあり）を以つてしたのであるが、これは謂ふまでもなく僧官相互間の勢力の結合を防ぎ、その總てを完全に國權の下に隷屬せしめんとした事を意味するものである。從つて斯る場合にはその職權も自ら極限されるわけであつて、即ち僧官獨自の權力行使は全く認められず、寧ろ單なる事務的官吏として國權の一般寺院に對する仲繼的役割を演ずるに留まつて居た。こゝに於いては當然從前に見る僧統系僧官、數州兼任僧官等は現はれては來ない。このやうな宋朝の政策は國家的方針の一反映ではあつたのであるが、然しこれに依つて佛敎はそれ自體の有つ性格を全く無視せられ、假令出家者なりとも、國家成員の一部と看做さるゝに至つた事を物語るものである。その點或は宋の佛敎は國家を背景としたものであつたかも分らない。然しそれと共にそれは何等特色のないもの、即ち內面的に生氣の存しないものへと變轉して行つたのであるとも考へられるのである。

## 回回館譯語と其の國際性

田坂興道

華夷譯語の一たる回回館譯語は、語彙と來文とを有する外國文字を併記された系統のものと、語彙のみで來文を有せず、しかも外國文字を全然含まぬ系統のものとの二種がある。前者に屬するものとしては、伯林國立圖書館所藏鈔本・東洋文庫所藏明鈔本・巴里國民圖書館所藏淸鈔本・英國劍橋大學圖書館所藏本（これは語彙のみ）・巴里アジヤ協會所藏淸康熙年間鈔本（同上）・大英博物館所藏本（同上）・內閣文庫所藏西域同

文表中の回回館表文（これは來文のみ）がある。（廣東駐在の伊太利領 Guiseppe Ros 事氏所藏のものもこの系統に屬するかと思ふ。）後者に屬するものには、倫敦大學所藏鈔本・佛印河内の遠東學院所藏鈔本・靜嘉堂文庫所藏鈔本・德島市阿波國文庫所藏鈔本及び故稻葉博士所藏鈔本の五種があるといはれてゐるが、稻葉氏本の華夷譯語に含まれてゐるといふのは稍々疑問がある。

さて回回館譯語に見える外國語即ち回回語は新ペルシヤ語である。それではこの語を以てする回回館を通じて如何なる國々が、支那朝廷と通好したか、その手懸りとなるものは、回回館譯語中の來文（表文）である。この表文を整理し、且つ大明實錄その他によつて、明代に於ける東西交渉の實態を檢討して見ると、回回館を通じ、新波斯語で、通好した國々としては、東西トルキスタン・イラン諸地方のみならず、西アジヤアフリカ乃至は恐らく歐洲の國々を擧げることが出來、南アジヤの諸國の一部もこれによつたと思はれる證據がある。かやうな次第で、四夷（譯）館中、たゞ獨り回回館のみが、一民族一國家に限定されず、極めて廣汎な國際的役割を有して居り、新ペルシヤ語即ちイラン文化の傳統が依然として東西交渉上重要な地位を占めたことが判る。（以上の詳細は近く東洋學報に發表する拙稿「回回館譯語語釋」に就いて見られたい。）

## 清朝・李朝の王族と天主教

赤木仁兵衛

清朝の王族と天主教の關係は入關直後の順治帝から始まつが、同帝は宣教師の天文に關する知識を尊重したに止り、天主教其物に對する認識はなかつた。康熙帝は教理に對する相當の理解を有し、宣教師達を優遇はしたが、現實主義者の彼はこれに對し信仰を持つといふ事はなかつた。雍正帝はこれと異り、佛・道教を信仰し、天主教には非常に冷淡な態度を採つた。爲に地方に迫害が瀕發し、布教は禁止されるに至つた。乾隆帝は西洋學術に對する趣味は康熙帝に劣らず、在廷宣教師の學識を極端に利用したが、教理を理解するとか布教を許すとかの心はなかつた。（以下の諸帝は省略する。）

李朝に於ては天主教は一部儒者の手により秘密に學問の形式により輸入された爲、當時の王たる正祖以後の諸王は教理を認識する事なく、宗主國支那に於いて邪教として禁止されてゐる以上、全面的に禁止の方針を以て臨み、これに黨爭の問題が加はつたりして屢々大迫害が勃發した。唯大院君は他の諸王に較べると多少天主教に對して交渉を持つてゐたが、種々の國際的狀勢の變化から迫害を行ふに至つてゐる。

以上清・李兩朝の王族の天主教に對する態度を比較すると、宣教師が始めから帝王に謁して布教の許可を願つた支那に比し、學術として祕密に而も宗主國たる清朝に於いて邪教として禁止された後に流入した李朝の王族が、これに對し大なる理解を持ち得なかつた事は當然であらう。一方宣教師の立場から見ると、一國の元首の入信は彼等の最大の目的であつたが、一部の王族の入信はあつても、帝王はこれを信ずるといふ事はなかつたので、彼等の目的は成功し得なかつたと思はれる。彼等の努力は清朝の帝王に存分に利用されたに止り、彼等は典禮問題により自ら破綻を招き、支那の舞臺より退かざるを得なくなつたのみか、朝鮮への傳道に大なる妨げとなつたのである。

# 唐初の名族太原王氏世系考

守屋美都雄

支那家族制度の史的變遷を具體的にあとづける方法として、私は唐初の名族太原王氏の族的勢力の盛衰を觀察することゝした。太原王氏は新唐書柳沖傳に見えるやうに博陵の崔氏、范陽の盧氏等と並んで唐代に於ける代表的な氏族であるからまづ之れを捉へてみたのである。

王氏の系統は新唐書宰相世系表によると大別して三つあり、一は琅琊王氏、二は太原王氏、三は京兆王氏となつてゐるが、太原王氏は更に細別して（イ）大房（ロ）第二房（ハ）河東（ニ）烏丸（ホ）烏丸王元政の系統（ヘ）中山（ト）北魏汾州刺史王滿の子王大璉の系統の六つを數へうる。

しかし乍ら、新唐書の記載には幾多の脫漏、誤謬があるので、私は右の諸系統の個々につき碑文、正史列傳等を用ひて批判を行つたところ次の結論に達した。

（一）河東、中山二系統を太原王氏として扱ふことは可成り危險である。何となれば河東王氏は琅琊王氏と通譜した痕跡があり、又古今姓氏書辨證にも琅琊の出なりとあるからであり、中山王氏は代々甘肅省方面に住まつて居り、太原に居つたといふのは單なる傳承以上に出ないらしいからである。

（二）大房、第二房は夫々狹義の太原王氏の王瓊の生んだ王遵業、王廣業兄弟より出でたことが判るが、遵業、廣業の弟延業、季和より出た第三房、第四房の系統は世系表では明示されてゐない。然るに白氏長慶集所收の王恕碑によつて前記トの王大璉の系統が第三房或は第四房に當ることが明かになる。

（三）烏丸王元政の系統は劉夢得文集所收の代郡開國公王氏先廟碑によつて、烏丸王氏の主流ともつと緊密に結びつくことが判る。

（四）太原王氏の世系は世系表では周靈王太子晉まで溯ることになつてゐるが、確實なる史料によつて溯りうる限度は後漢末の王澤、王柔の邊までゞ、それ以上は疑問である。從つて狹義の太原王氏と、烏丸王氏とは後漢初期の王覇を共に祖先と仰ぐことによつて互ひに結びついてはゐるが、この結びつきは必しも信ずるに足りない。

（五）太原王氏の溯源はたかゝ〳〵後漢末に止まる。又その家系が頗る增加したのは北魏頃のことらしく思はれる。

以上の外に世系表に洩れてゐる人名を補ふ餘地も頗る多いし、又右に述べた太原王氏世系よりえたる結論が他の名族にも共通するものかどうかといふこともなほ研究しなければならない。併しその點は凡て後考に委ね今は王氏世系の系譜學的檢討のみに止めておく。

# 清朝時代に於ける黑龍江省の開發

北山康夫

清朝時代滿洲は北支よりする移住民の歷史的なる大移動によつてその地理的景觀を全く一變するに至つたのであるが、殊にその最北部に位置する黑龍江省に於ては、その變化は顯著であり急激であつた。

元來黑龍江省は清初達呼爾や索倫等の民族が原始的

なる生活を營んで居つたところであるが、康熙二十年代露西亞との戰爭が始まるや、康熙帝は瓊琿・墨爾根・齊々哈爾等の地に城郭を築き、軍隊を駐屯せしめ、更に瓊琿より墨爾根・齊々哈爾を經て吉林に至る驛站を設けたゝめ、南滿地方との交通が頻繁となり、又松花江・嫩江・黑龍江の水運が盛に利用せらるゝことゝなつた。こゝにはじめてこの地方が開發の黎明期を迎へたわけである。

然しながらこの時代に於けるこの地方の住民は多くは軍人又は流人であつて、その開發も遲々として進展しなかつた。然るに咸豐時代に至るや、既に飽和點に達した吉林省の移住民は滔々として松花江を渡つて呼蘭平野に殺到するやうになつた。これらの移住民は最初は着のみ着のまゝで移住して來たのであるが、年月を經ると共にその生活も漸く安定し、同治を經て光緒に入ると共に本格的なる開發が行はれるやうになり、それと共に支那文化も洪水の如く輸入せられ、その生活樣式も支那色に塗りつぶされてしまつた。

齊々哈爾に於ては從來住宅といへば平房といふ土を以て葺いた家であつたのが、段々瓦葺に變つて行き、又從來この地方では公文は全て淸文で行はれてゐたのが、同治以後になると淸文と漢文が併用されるやうになり、光緒中葉以後は淸文は全く用ひられないやうになつた。從來の滿洲的色彩はこゝに全くその姿を沒してしまつたわけである。

## 世說新語に現れたる個性について

村上嘉實

世說の文章は著しい特色を有つてゐるが、その中に現れ來る人物も亦、各々個性を以て躍動してゐる樣が窺はれる。人の容貌・性格についての觀察は鋭くなつてをり、顧愷之の肖像畫が眼睛に重點をおいて、背景や形の上にも個性を生かすことに苦心した話なども記されてゐる。殊に女人の姿が種々に描かれてゐる事は注意をひく。凡そ個性は古い傳統から離れる所に進展する。世說に現れた魏晉の時代は正にこの過渡期であつた。北方民族の侵入と佛敎の流入は、こゝに異なるものへの對立を通じて自己を發見し、人々が不安動搖

の危機に直面したことは、個の全貌を現すによき機會となつた。老莊及び佛教の流行は、人をして深く內省することを教へ、形而上的に普遍的なるものへの到達は、同時に個の差別を自覺せしめ、淸談が論理を闘したことも亦、知識を通じて個の立場を明かにした。又魏晉の世が漢代の禮教的形式性を脫し感情を解放したことも、一般に個性の自由なる出現を招來した。更に九品中正により人物批評が盛んとなり、人物を層位的等級に分類したことは、比較されることにより相互の個性を發見するといふ風習を呼び起した。しかし當時の社會が貴族を中心とし、人物の層位は嚴重なる家格尊卑の次第により左右されしことは、人間を一種の類型の中にあてはめたものであり、個性の全面的解放を妨げた。しかしこの類型は、既に解放されたる個性の形式化ではなくして、未だ自覺されない個性がその發展の過程において當然經なければならない型であつた。かく思想・宗教・感情の上においては深まりつゝ政治的社會的にはなほ嚴重なる制約の下に立つてゐたのが當時の個性で、この點中世的なる所以のものをもつてゐた。

# 競渡考

山本達郎

支那に於ては古くから一種の年中行事としての競渡（卽ちボートレース）に關する記錄が傳つてゐるが、それが盛んに行はれた場所は主として揚子江流域及びそれ以南の地方である。競渡は支那のみならず安南に於てもラオスに於てもカムボヂヤに於てもタイ國に於ても行はれたのであつて、是等の諸國に於ては大體に於て國家的な祭禮となつてゐると言つてよい。更に競渡はビルマに於てもベンガル州の各地に於ても行はれマライ地方にも若干その例がある。支那より東の方に於ても臺灣・琉球・長崎でそれが行はれてゐるのであつて、其の他の日本內地の祭禮の中にも同じ系統に屬する競渡を認める事が出來る。此の樣に東南アジヤに於て廣く年中行事として行はれてゐる競渡は、同一起原のものとみて誤ないであらう。

競渡は本來は祭禮として雨乞の色彩が甚だ强く、又農耕的な豐饒を祈る意味をも持つてゐる樣である。安

南に於ては最も明確に雨乞の行事として現れてゐる。競渡には時々祓の意味があり、又時々水の神に對して捧物をする儀式が附隨してゐることがある。競渡用ひる舟は甚だ細長い特別な舟で龍舟とか爬龍船とか稱せられるものであり、大勢の人が橈を用ひて漕ぐのであるが、或はそれは元來は水の神の精たる龍神の姿を眞似たもので、その競漕は水の神の祭であると共に雨と豐饒とを齎すべき呪術であつたのではなからうか。

## 白霫民族に關する一疑義

山本守

白霫民族に關しては、白鳥博士が史學雜誌上に於いて、鳥田好氏が滿洲學報に於いて、何れも本民族の住地を滿洲に置くのは新唐書の誤解に出づるものにて、霫と混同せるものなることを力說されたのであるが、康德七年熱河省喀喇沁右旗和樂村西山甲張家營子より出土したる「大契丹故朝散大夫守少府少監知上京鹽鐵副使飛騎尉借紫鄭君墓誌銘」に

君諱格世爲白霫北原人……以大安六年八月十三日暴疾卒于公署。春秋五十七以其年十月二十四日歸葬于白霫北毅羅水北原附先人之墓次。……

とあることによつて、少くとも遼代（新唐書編纂當時）には白霫なるものが今の熱河省内に實在したもので、新唐書が霫を白霫と誤つたとのみは言ひ得ざるものである。（詳細は滿洲學報第八號掲載の豫定）

## 不空三藏の天竺渡航に就いて

—特に付法傳の史料的價値—

長部和雄

不空三藏の天竺即ち獅子國渡航に關しては今日迄學者の注意を牽く所となつてゐない。何故ならば彼には旅行記なく、隨つて之に就いて歷史的研究を企てることと不可能な爲めであらう。然るに茲に私が敢へて問題とする所は、三藏の廣州發航の時期に就いて支那史傳の殆んど全部が誤つてゐる點にある。今其の精數を擧げることは出來ないが、金剛智三藏の遺命に依り敕許を俟つて壯途に登つたのであるから、玄宗の開元二十九年秋以後である。此の時期を正しく傳へた史傳は、支那に於ては『宋高僧傳』あるのみ、我國に於ては實

に弘法大師の『祕密曼荼羅教付法傳』なのである。更に詳しく云へば唐の飛錫撰の碑銘及趙遷の『不空三藏行狀』に依れば影塔成つて後師子國に使したのであつて、其の時期は『金剛智三藏塔銘』に天寶二年二月二十七日と見えてゐる。故に不空三藏の廣州發航も天寶二年二月二十七日以後でなくてはならない。而して恒信風の關係を考慮に入れると正しく天寶二年二月二十七日直後であらうと想像される。兎も角金剛智三藏の示寂と之に引續き不空三藏が遺命に依り詔を齎して獅子國に向ひし年次を正確に傳へ後世の眞言傳記類の指針となつたのが『付法傳』である。猶此の梗概に云ひ盡せない所は、高野山大學密教研究會編輯『密教研究』第八十三號（昭和十七年十二月刊）を參照され度い。

## 清廷薩滿教の祭神に就て

井上以智爲

清朝宮廷薩滿教の祭神中、皇后の正寢・坤寧宮内の六神と宮外で祀る天とが主要祭神で、堂子の三神は遺物の保存に過ぎない。坤寧宮六神中、釋迦牟尼佛・觀世音菩薩・關帝の三神は首座たる西炕上で毎朝祭祀され、穆哩罕・畫像神・蒙古神の三神は夫に亞ぐ北炕上で毎夕祭祀される。現代の滿洲薩滿教は複雜多樣であるが、家巫と職巫とに大別され、家巫は主婦等が自家の正室で祖靈神板子を祭祀する。宮廷薩滿教　祠場・祭主・儀禮など家巫と全く一致し、祭神は神板子とは異るが、坤寧宮の祭神と宮外の祭天とで滿洲薩滿教典禮は具備する。抑々北京遷都以後、關帝が朝神に參加するのは、滿洲薩滿教の特徴たる神前牲豬省殺の儀禮が殺生禁戒の佛菩薩とは調和しない缺陷補塡の爲で、この補强更新の傾向は清朝黎明期の滿蒙漢文化交流變遷の大勢を一貫して、朝神と夕神、坤寧宮神と堂子神との間にも見られ、畢竟堂子原始神の補强策として、北方蒙古系又は南方漢族系諸神を隨時添加したものである。入關以後、坤寧宮外祭天制を採つてからは、國初の祭天殿たる堂子は唯宮廷儀禮を莊重化する特權的附帶物で、その亭式殿内の紐歡台吉・武篤本貝子二神は改變以前の、遺忘された原始神であるに對して尙錫神は其後の新加で　所謂田苗神說は一顧の價値なく、鄧將軍廟說は却つて再考を要する。蓋、鄧・董は語音

相似て多分太祖の葦姓使用に因んだ葦祖祭祀であるが、其後愛親氏と改め、更に長白山天女神說强調され、上天卽祖神說が流布し、最早葦祖祭祀が許されなく夕神と交替遷徙したものであらう。

## 龔定盦の蒙古學

石濱純太郎

龔定盦の傳は「淸史列傳」には卷七十三文苑傳四に龔自珍で出てゐ、「淸史稿」には列傳文苑三に龔瑩祚で出てゐる。諸種の學を爲すに志有つたから、學史では諸派に入れられた。張之洞の「書目答問」では漢學專門經學家にも史學家にも不立宗派古文家にも列ねた。內藤湖南先生の「支那學問之近狀」では常州學派公羊家の下に名を掛けられてゐるが、章炳麟は「龔自珍不可純稱今文、以其附經于史與章學誠相類、亦由其外祖段氏二十一經之說、尊史爲經、相與推移也」と云つてゐる。章氏の論訂に據つて支偉成の「淸代樸學大師列傳」は作史學家列傳に編入して了つた。生平著作等身と云はれるが多く佚して傳らない。「四部叢刊」所收の文集、國學扶輪社刊行の全集などにて其大略は窺はれる。大著を爲さんとした一は「蒙古圖志」である。自ら西北兩塞外の部落世系風俗形勢原流合分に於ては曾て少しく心力を役したと云つてゐる程で、蒙古西域の研究に努力してゐたから、「欽定西域圖志」に對して「蒙古圖志」を編纂せんとしたのである。惜むらくは彼を學用した上官程同文が歿したので、孤學に助けなくして圖志は竟に成らず、集中に惟だ諸序及び擬進上表文を存してゐるが、亦以て其精博なるを見るに足るものがある。圖志編纂の梗概は擬表文で分るし、諸志表序の殘存せるものは十あつて蘊蓄の程も推測出來る。集中尙ほ蒙古學に關する文もある。たゞ彼の詩に「手校斜方百葉圖、官書似此古今無、祇今絕學眞成絕、卌府蒼涼六幕孤」と咏じた圖は見るよしもない。當時奇才を以て並び稱せられた魏源の蒙古學は世に喧傳されてゐるに比し寂寞たるは痛ましい。梁啓超は「淸代學術概論」に於て「綜自珍所學、病在不深入、所有思想、僅引其緖而止、又爲瑰麗之辭所掩、意不豁達」と評してゐるが、多才卓識なる彼の學術は尙ほ後賢の論定を待つてゐると思ふ。